

# バジャウ (サマ人)の漁撈と歴史

## Fishing and history of Bajau (Sama)

1K05B118

指導教員

主査 寒川恒夫先生

菅沼 卓真

副査 岩井雪乃先生

### 序章

「漂海民」陸地に特定の住居を持たず、舟上で水上を定期的に移動しながら生きるバジャウ(サマ人)がいる。しかし、そのような舟上で水上を暮らすバジャウは、現在ほとんどいない。多くのバジャウは、各国の近代化の影響を受け、陸地もしくは海岸沿いに定住する家を持っている。本論文では、各国の近代化の歴史とバジャウの生活様式の変化を一通りの時系列でまとめることを目的とする。そうした中で彼らの漁撈の方法(もしくは経済活動)がどのように変化していったかをまとめることをもう1つの目的とする。

### 第1章

第1章では、研究対象・研究地域・研究方法について述べる。研究対象は、サマ人(バジャウ)である。サマ人は、フィリピンのスールー諸島からマレーシアのボルネオ島サバ州、インドネシアのスラウェシ州などまでの広範囲に広がり分布している。本文では、スールー諸島および北ボルネオ北岸のサマ人を取り扱う。文献を通して研究しているのは、このスールー諸島から北ボルネオにかけて地域の歴史である。また、筆者がフィールドワークをした村として、サバ州の都市コタキナバルにあるフィリピン人移民(バジャウ族)の集落(A村)を取り上げている。調査・研究方法は2つである。1つは文献を通しての調査、1つは現地でのフィールドワーク・聞き取り調査である。文献調査については、本文の後に参考にした文献を載せている。フィールドワークは、A村の水上集落にいるバジャウを対象に行なっている。2007年春・2007年

夏・2008年春に行なったフィールドワークの情報を今回利用している。

### 第2章

バジャウは、1960年代以降近代化の波を受けて、生活する場所や生活するスタイル、が変化していく。それが、生計戦略やバジャウの漁撈にも影響を及ぼしていった。その様子を6つの時代に分けて考える。大きな流れとしてスールー諸島から北ボルネオへの移住が挙がる。この理由は、もともとバジャウ族の移動性の高かったこと。植民地支配によるボルネオの経済発展が彼らの移住を促したこと。さらに内戦が起こり、サバへの移住に拍車をかけたこと。以降も、ボルネオに就労機会を求める動きが続いている。加えて、移民を利用する政党が現れたことも原因として挙がる。

### 第3章

近代国家がバジャウに与える理由として、プロジェクトICについて、ここでは詳しく触れたい。まず、プロジェクトICについての説明をして、次にプロジェクトICが行なわれている実例として、A村を挙げる。

筆者がフィールドワークを行なったA村も、例外ではなくプロジェクトICに関わっている村であった。まずA村の基礎情報・概要に触れる。次に、プロジェクトICについて考えるために必要なほかの情報を確認していく。それから、A村(特に村長)とプロジェクトICの関係について指摘したい。最後にバジャウがこれから生活していく上で、マレーシアやフィリピンなどの国家の状況が大きく左右す

るであろうことを指摘する。

#### 第4章

A村の経済状況について、まとめたデータを集めることができたのは、2007年の夏のフィールドワークである。まず、A村の経済状況・村人の漁撈の状況をまとめる。A村のほとんどの村人は漁師であることがわかった。一方では、漁師の職に不安を持つ声も聞かれた。

#### 終章

バジャウは、自らが置かれている状況を理解し判断して、選択をしてきた様子が分かった。国家の流れとバジャウの移動の歴史をまとめることはできた。更に気になることは、今後「バジャウの文化的習慣がどの程度残り続けるか」である。定住化するようになったのは、大きな変化である。しかし、その定住化は私たちのそれとは異なる。一方、漁撈についてはもう少し、その変化の様子をまとめたかった。また今後の漁撈のあり方を考えるに当たってはA村の漁撈についての情報を集めること、村人への聞き取りが必要になるだろう。